

私が戦争に受けた影響

戦争、それがもたらす心の傷。形を変え親から子へ子から孫へと受け継がれていく。暴力の連鎖である。だから再び戦争が起こるのかもしれない。本当に戦争をやめたいと思うのなら、心の傷が癒されなければならない。だとすれば、自分に受け継がれた戦争の傷とはどのようなものなのだろう。この関心を持って、ジュリアンのワークショップ¹に参加した。

強烈に印象深かったのは人々のアテンションの良さだった。確かにワークショップではマイノリティーの日本人が特別の関心を持って迎えられたが、でもそれだけではないようだった。参加した誰も彼もがアテンションを向け合い、一人ひとりが自分の人生の主演と感じているようだった。アテンションひとつでこれだけ人の思いを変えることができるものなのか。この思いをもって日本に帰り実践してみて、更に驚いた。アテンションを向けるだけで、人々は話し出し、時には目に涙を浮かべて身の上話を始めるではないか。大きな財産を得たことに気づかされた。

さて、肝心の戦争の傷については次のような再評価を得ることができた。

私の父は障害者である。足が片方ない。軍艦が沈んで、泳いでいる途中、サメに食われた。これが幼い私に話して聞かせた父の話。だが作り話だった。真実はこうだ。父は12歳の頃、膝にできた切り傷が元で、カリエスになり・・・カリエスとは骨に結核菌が入り込んでしまう病気・・・当時の医学では足を切断しなければ毒が全身に回って死んでしまうと医者に言われ、温泉治療などいろいろ試みたけれども、ついに切らなければならなくなった。戦争ではなく怪我がもとだと教えられてはいたが、詳しい事情を知ったのはつい2年前のこと。

父は真実を語れなかった。高校卒業のとき成績は一番だったのに、総代には選ばれなかった。父は戦争に行けない人間だった。お前は一人前じゃない。お国のために働けない厄介者だ。そんな引け目をずっと引きずっていたのだと思う。わたしは父が弱い人間だとずっと思っていた。そしてその子どもである私自身も、弱々しい人間だという思いに取り付かれていた。「内弁慶」という言葉がゾッとするほど嫌いだった。まさに私のことだったからだ。

父と母は仙台の人間だが、親類縁者のまったくいない北海道で新しい生活を始めた。家族のしがらみでさんざん傷つけられ苦しんだので、新天地で新しい生活をはじめようと思っ

¹ 2006年11月にオーストラリアのシドニーで行われた「戦争の傷を癒して、平和を築く」ワークショップ。リーダーは世界変革を共に考える国際照会者であるシュリアン・ワイズグラスであった。

たのだろう。だが現実には甘くはなかった。障害者の父は周囲から軽く見られ、家族は地域社会から浮き上がっていた。母が、「近所の人から、こちらから挨拶しても、挨拶してくれない」と父に愚痴をこぼしたのを今も覚えている。父は酒を飲むことこそなかったが、時々かんしゃくを起こした。外ではいつもニコニコして柔和な人という印象だったが・・・。そうやって差別的な社会で生き延びてきたのだ。だが、帰宅するなり母に向かって荒れ狂う父を見て、わたしは父を弱虫だと思った。

わたしもよくかんしゃくを起こした。母はそのたびに心配になり、わたしをたしなめ、おかげで強い罪悪感を持たされた。それでも友達の間でも学校でも決して自分を出すことはできなかった。「内弁慶」、それが私だった。そんな自分を好きになれず、わたしはとても低いセルフ・エスティームで苦しんできた。

戦争にいけない引け目。それが弱虫の男という劣等感として私に伝えられたのだ。ワークショップで気づいたことは、父が真実を語ってくれていたら・・・ということだった。自分の障害とどう向き合ったのか。どう乗り越えたのか。どう克服できなかったのか。そうしたありのままの姿が本当の強さではないか。そんな話が聞きたかった。そうすることで大人の世界に挑んでゆく年齢になったときに、私には良い備えができていただろうに、と。

今も私は自分の戦争の傷に取り組んでいる。最近気づいたことは、私の内弁慶は強さの現われだったということ。家の中で大声で泣きながら怒る。それは私が外で受けた傷を癒してくれていた。そうすることで外に立ち向かってゆく柔軟な知恵と力を回復したのだ。もしタイムマシンであのときに帰っていったら、「お父さん、たくさん泣いていいよ、気の済むまで怒っていいよ。」「お母さん、本当に苦しいよね。でもお父さんを受け止めてくれてありがとう。おかげで僕たちは生き延びてこれたんだよ。」と言ってあげたいと思う。あの父を今私は完全に肯定できる。その父を、私は誇りに思っている。かんしゃくは弱さのしるし。これはウソ。むしろかんしゃくは柔軟な力強さを取り戻すための方法。父も私も充分正しかった。これが真実である。

戦争はウソを幾重にも塗り固めないと起こらない。そのことで真実を人々の目から覆い隠す。戦争は勇ましい。ウソである。真実は悲惨。真実を知らされないと、どうやって乗り越えていったらよいかを考えることができない。戦争を終わらせるなんてできはしない。無力感。これが若い世代に受け継がれた戦争の傷その一だ。

戦争は、真実を語れない雰囲気を作り出す。隣組の監視体制がひかれ、戦争に反対する言動があれば密告され、憲兵に逮捕された。恐怖が蔓延し、真実が言えなくなる。隣近所が信頼できない。親兄弟にも本当の気持ちが言えない。人々は分断されていく。疑心

暗鬼、この雰囲気は今も日本を覆っている。これが戦争の傷その二である。

戦争と戦争に向けての教育は、人々をして真実を語れない人間にってしまった。真実は平和を築く。真実は癒しをもたらす。どんなに恐ろしい、見たくない、醜いものでも、真実を語ることで、どうしたらよいか考えることができる。そういえばマハトマ・ガンジーがその非暴力運動の原点とした概念はサティアグラハ（真実をつかむこと）だったっけ。

How War Affected Me

プレゼントタイム 2007年4月号 72 - 74 ページより

Fumihiko Hayasaka

早坂文彦

この記事の英訳：エマ・パーカー

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります。(原文2007年)。